〝若いご両親に〟

磯部 泰

「三つ子の魂百まで」というが、現代の学問でも、人の性格は、遺伝と六才までの環境で、その大半が決定され、一生について回ると教えている。従って、家庭こそは人格形成の最初にして、かつ、決定的とも言える場である。

人に好かれる性格、嫌われる性格。また、勉強の習慣も、運動好きのタイプも、みな、この頃、主として両親ないしは周囲の大人の、幼児に対する対応の仕方（マザリング）一つできまるとしたら、健全な小・中学生は、平凡な結論ながら、夫婦仲の良い、明るく平和な家庭から、親の生きざまを手本として育ってくると言えよう。

また、共働きの家庭が増加している実情から、〈子育て〉においても、夫婦が協力し合わねばならぬのは当然であり、マイ・ホーム型の現代の家庭においても、ピッタリと息の合った厳父・慈母の両親の在り方は、良き伝統として守り続けていきたい。

元来、父親の本務は社会にあり、仕事にある。家庭はその休養の場になっているのが大方であろう。従って、将来はいざ知らず、大半の家庭において、わが家のホーム・ドラマの脚本は母親が担当しているのが実情であろう。

すなわち母親は、くつろいでいる父親の姿が、決してそのすべてではない事を家族一同に理解させた上で、自信をもって家庭をリードしよう。健康で明朗・快活。話し上手よりも聞き上手の母親を中心に、家族全体が、それぞれ、家事における役割を分担し、信頼と愛情とで結ばれよう。

また、子どもは単に甘やかすだけでなく、たしなめる時には厳しく叱るという、真に愛情のこもった教育やしつけは家庭でしか出来ない事を念頭におこう。

物質中心主義の現代社会の解毒剤として、尊いものをおそれつつしみ、清らかなものにあこがれる宗教的情操と、「子どもの時、欲望を押える事を教わらなかった人は不幸だ」という哲学者カントの言葉をそのモットーとしてほしい。

「ブリキの勲章」上映 生徒も父母も感動！

期日　11月1日　文化祭当日
場所　小合中　体育館
参加者　三五〇名

非行化が日常化し、校内暴力が荒れ狂っています。

「校内暴走、教師はねる」「先生九人に集団乱暴」「先生けられ腎臓破裂」「女子中学生、ライターのガスを吸い死亡」などの記事が新聞に載らない日はありません。

少年非行は戦後三番目のピークを迎えたと言われていますが、その山はいっこうに下がる傾向をみせません。

その原因はどこにあるのでしょうか。

一つには世の中の乱れに最大の原因がありそうです。大人の道徳が地に落ち、金や地位に目がくらみ、人として大切な、心を育てることを忘れてしまったからではないでしょうか。二つには家庭崩壊があります。楽しかるべき家庭が、夫婦、親子のいがみあいや断絶をきたしていないでしょうか。三つには子どもを育て教える側に問題があると思います。昔と違う今の子に、昔のやり方の説教で子どもが良くなると思っていることに、悲劇がありそうです。

今回上映した「ブリキの勲章」が、非行の原因や実態を知る上で役立ち生徒・父母・教師、それぞれのあり方を見つけ出すことにつながるなら幸いだと思っております。

◎最高に感動した場面

1. 木村先生の誠意ある姿…28%
2. 合唱コンクール優勝……26%
3. 主人公、根本の行動……54%

○ツッパリ生徒への説得…18%
○リンチに耐えた……14%
○ツッパリから立ち直った…13%
○先生との約束を守った… 9%

ブリキの勲章を見て

一年A組　長尾文恵

根本英雄は、中ランを着てきた。ある生徒は、根本なら、着てもいいと言う。先生は、そう言った生徒に、

「それなら、自分が、その中ランを着て、街の中を歩けるか。」

と、聞くと、その生徒は

「そしたら生きて帰れない。」

と、言った。それなら、根本だって、同じことだと思う。自分はだめだけど、その人ならいい。という気持ちを、私は、ゆるせなかった。

「俺からツッパリを取ったら何も残っていないんだ！」

と、言うようになった。

校内の合唱コンクール、始めのうち彼は、歌わなかった。でも、合唱にみんなで努力することがツッパリに代わるものだとわかり、優勝に向かって頑張った。その結果、みごとに優勝した。一番うれしかったのは、根本ではないかと、私は思う。

少しずつ非行から立ち直っていくようになった根本は、先生や生徒たちにはげまされたから、ここまで、こられたのだと思う。それにしても、根本の立ち直りに私は、とても、感動した。

最後に彼を信じ、うらぎられても、なお、情熱を、かたむけて立ち直らせた先生には、本当に感動した。

ならぬものは ならぬのです

どこの学校でも「学校と家庭を結ぶもの」として、学年だよりや学級通信が発行されています。子どもの学校生活の様子や学年、学級の連絡が紙面を飾り、学校を知る手掛りとなります。

つぎに、月三回発行されている、ある小学校の「学年だより」を紹介します。

〈歯みがき週間〉

今週は歯みがき週間です。毎朝夕の歯みがきの様子をカードにつけています。

二日もやってこないA君に、その理由を聞くと、「朝八時に起きて、時間がありませんでした。」というのです。「めしはどうした。」「食べませんでした。」「家の人は勤めに出て誰もいないのか？」「みんないます。」「……」

おかしい。どこかがおかしい。家の人がみんないるのにかまわないなんて。

めしを食べないで登校している子がいるのに、家の人が気づかないなんて。

どんなことがあろうとも、登校するまでに一時間は必要です。洗面、身仕度、床上げ、朝の仕事、登校準備……の内容をきちっとやり、すっきりした気分で出発するためにはそれだけの時間が必要なのです。

朝の起床が決まっている家庭では、自然のうちに「お互いに努力し合って、自分を家族に合わせよう」とする連帯の気持ちを持った子が育っています。反対に、日常生活の中で気ままに過している子は、自分の利益を真先に押し出すことは熱心でも、みんなのことを考えて行動する子は少ないものです。

たかが朝起きぐらいのこと、そうめくじらをたてることもあるまいと思いたいところですが、そうはいかないのです。

「しなければならないことは、どうしてもする」「してはならないことはしない」という強い意志を持った子を育てるには、こうした毎日の小さな積み重ねが大切です。

どこの家でも、これだけは「絶対認めない」というものと「必ず実行させる」ものを決めておいて、子育てにあたりましょう。

なおこの学年では、保護者からの「子育て意見」をリレーでつないでのせています。二篇を紹介しましょう。

子の成長を祈って

古津　加藤朝雄

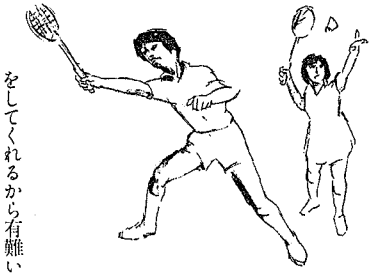
「お父さん、バトミントンしよう。」「今、忙しいからあとでね。」「お父さん、これ教えて。」「今忙しいからあとでね。」

――そして、後になっても結局相手をしてやれずに終わってしまう。

子どもには期待をかけすぎるくらいかけておきながら、自分はさっぱり子どもの期待にそっていないみたい。

「おーい、手を貸してくれ。」「ちょっと待って。」「こらあ、早くしないとゲンコツだぞ。二三……。」

これを実力の差というのだろうか。？。わがままなのは親の方かも。でも、子どもはこりずに相手をしてくれるから有難い。



親に似ないで立派に育ってほしいと祈りながら、こんな毎日をくりかえしている。

私の子育て ―父母の投稿から―

おしゃべりタイム

朝日　斎藤一郎

おしゃべりというと何となく口が軽く、余計な事をいうような意味にとられそうですが、我家の夕食は、いわゆる「おしゃべりタイム」である。

三人の子ども達が、我先にと今日の出来事を順番にするのである。ある時は順番をめぐって、又、ある時は会話の途中にケチをつけたりしてうるさく感じる時もありますが、兄妹同志お互い牽制し合いながらも相手を認める心や、自分の意見を云う自我、あるいは自分ならどうするという自立心のようなものが芽生えている様子が見受けられるようになりましたが、親や周囲の人の指導や助言が一番大切な年頃ではないでしょうか。

皆さんの家庭では、どんな時に「おしゃべりタイム」のようなものを設けられておりますか。？